

スウェーデンの図書館教育 —変革期の図書館情報学教育

岡澤和世

1. スウェーデン図書館教育の発達

現時点でのスウェーデン図書館教育の発展はいくつかの視点から理解することが出来る。一般的な学術性と学位授与を重視する大学の中で、スウェーデン図書館学校 Borås 大学は独自の教育体制を確立してきた。ここは今日まで全国の図書館員を養成する唯一の教育機関であった。それが1993年を機に大きく変貌しようとしている。

その発展を底辺から支えているのは大きな2つの希望である。

- (1) 図書館界の希望—図書館職と情報研究を一つの独立した学問として確立。
- (2) 教育省の野心—高等教育後の大学教育の学術的基盤強化。

この問題を論じる前に、1993年6月1日以前のスウェーデンの図書館員養成研究プログラムの概要を簡単に述べておいた方が現在のものと比較する上で理解しやすいであろう。

1. 1 1993年以前の研究プログラムの背景

過去20年間、この研究プログラムは多くの重要な外的条件によって左右されてきた。

- (1) 議会の法令によって、(2) 政府の議決によって、Borås 大学はスウェーデン国中のあらゆるタイプの図書館員を教育する責任を任された。換言すれば、図書館員になるためにはこの大学に行くしか選択の余地はなかった。そして、大学は他のいかなる教育機関とも、図書館研究で張り合う必要もなかったのである。

図書館員養成学校は、スウェーデン第2の大都市 Göteborg 市から東に約70kmいった中都市の Borås 市にある。このロケーションは幾つかの利点を持っている。例えば、大きな大学には望めない地方大学特有のキャンパス・ライフがある。それはまた裏返せば短所にもなる。近くに大きな科学研究機関や図書館学に必要な研究資料施設、図書館関連機関がないため、これらと密接なコンタクトを保つことが難しい。

図書館学校は完全に独立した教育機関として出発した。その後、1977年の「高等教育改正法案」の結果、スウェーデンの総合・単科大学システムの一部になったが、総合大学に学部/学科を設け、大学院を設置することはできなかった。

スウェーデンの大学教育システムは2つのレベルに分けられる。

総合大学 (university)—教授陣を擁し、大学院研究科がある。

単科大学 (college) —専任の教授がいないか、大学院がない。

要するに、図書館学は専門の教授を持たず、大学院で基礎研究をする機会を持っていなかったのである。確かに大学教育システムには入れたが、リサーチの場としては期待されていなかった。その理由は、図書館学教育が大きな大学で一つの確立した主題分野として認められる程には基盤がしっかり確立されていなかったためである。中小規模の大学でも多くの研究プログラムがこの種の基盤を持っているのとは対照的である。換言すれば、Borås 大学は唯一の図書館教育機関でありながら、大学院レベルの研究や基礎研究を行う機会も権利も与えられず、他の大学から図書館情報学に、優秀な Ph. D. 取得スタッフをリクルートすることさえ出来なかったのである。

図書館教育がスウェーデンの職業訓練システムに組み込まれるようになると、完全な専門職養成教育と見なされるようになり、図書館職の実践志向がスウェーデンの大学院研究システムからこの研究プログラムの排除を決定的なものにしてしまった。これはいわば教授擁立と大学院研究を持たない多くの職業訓練教育の歩む道でもあった。これが図書館学を科学的学問として確立させるのをさらに難しくさせ、図書館員に科学意識を持たせることを困難にしたのである。

図書館教育が専門職養成教育であったために、そのカリキュラムは、良い意味でも、悪い意味でも、図書館界全般の特徴を反映させることになった。重点は主として、図書館実務教育に置かれ、実習が各タイプ別に実施され、必修であった。

Borås 大学しかないという現状と教育プログラムの職業訓練志向が、この分野の代表者に、自分たちの仕事は学術的研究をすることではなく、与えられた仕事をもっと忠実に現場に生かすことだという正当な理由を与えることになった。これは当該図書館情報学校の組織構造にも大きな影響を与えた。大学経営陣の大半はこうした考えの人達によって占められ、ほとんど疑問を持たれず、学術研究不要のまま、運営された。

1. 2 Borås 大学研究プログラムの内容 (1993年以前)

過去数十年と現在の一時期まで、Borås 大学の図書館研究プログラムは次のような特徴を持っていた。

- (1) 継続研究プログラムとして設定。この大学に入るには、少なくとも、総合大学または単科大学の、専攻した分野の2年生までを修了していることが必要。これに Borås 大学での図書館学研究期間、2年間を修了して初めて図書館員の資格が与えられる。
- (2) 教育志向は専門職員養成。そのため、大学院進学の道は途絶され、行きたくてもその機会を与える準備科目も提供されなかった。卒業論文は資格取得には必修ではなかった。
- (3) 研究プログラムの大きな2本の柱。
 - (a) 一学期修了後、公共図書館、学校図書館、大学・専門図書館の3コースのうち一つを専攻。
 - (b) 専攻図書館での10週間の実習—必修。

学生はこの他にいくつかの選択コースも受講出来るが、選択枠が狭く、公開されている講座数もわずかであった。

2. 図書館情報研究界の野心

図書館情報学を一つの自立した主題として確立し、出来れば制度化したいという願いは、何十年の間図書館情報学研究者たちが持ち続けてきた希望であった。もちろん反対者も多かった。専門職教育には学術的な大学院教育や基礎研究は不要という強力な考え方が長く保持され、今も生き続けている。

この考えにはそれなりの正当な理由があるが、これを覆す大きな力が徐々に育っていった。その発端が大学の新しい規律改正であった。それを受けていくつかの研究センターが作られ始めた。そして、その活動は学会誌を通じて賛同者を増やしていった。これは類い希な例である。図書館研究者自身が自らの手でこの主題の制度化を実現しようと、その地盤作りに着手したのである。このアカデミズム運動はスウェーデンの図書館情報学教育の改善を打ち出し、新知識と図書館基礎研究の学術的統合と、学生に大学院で研究が継続出来る機会の提供を目標に、実現に向けてその第一歩を踏み出したのである。

2. 1 Göteborg 大学図書館情報研究センターの設置

Borås 大学の図書館情報学研究プログラムにとってセンターの設立は大きな意味を持っていた。Borås 大学には教授を置けないので、Göteborg 大学に図書館情報学の大学院を設置することを考えたのである。Emin Tengstrom 教授の指揮のもとに、調査が行われ、教授は Göteborg 大学に設立される予定の図書館情報研究センターが Borås 大学と協力し合って、センターに図書館情報学研究所の大学院を設置することを提案した。この目的は図書館情報学研究所を社会的制度として一般に認めて貰うことにあった。それは図書館情報学校の能力向上に役立つだけでなく、図書館情報学研究所の国際的舞台の屋台骨としても役立つものと期待された。

2つの機関（Borås 大学と Göteborg 大学）は公式には2つの独立した教育機関ではあるが、協力し合ってこのビジョンを実現した。Borås 大学は基礎教育に責任を持ち、センターでは大学院研究を提供することになった。これによってスウェーデン図書館情報学は一つの独立した主題領域として本格的に制度化されることになったのである。ここでいう本格的な制度化とは基礎コースから博士課程研究まで一貫した教育研究システムを制度として認めることである。Pertti Vakkari は20回図書館情報学国際会議のオープニングの挨拶の中で、図書館情報学の自立にはこうした制度化の確立が重要であると指摘している。

2. 2 外部教育環境の変化

今、図書館情報学教育を取り巻く情勢は世界的規模で大きく変化している。図書館情報学研究における大学院設置と教授陣の擁立はスウェーデンの図書館界がこれらの変化に対応してい

くための具体策の一例であった。

北欧4ヶ国の図書館情報学研究動向を調査した Vakkari たちの論文によれば、1965-89年の24年間に行われたスウェーデンの図書館情報学ドキュメント数は668点で、4カ国中最も多い（デンマーク-279点、ノルウェー-105点、フィンランド-403点）。このように一番図書館情報学研究数が多いにも拘らず、他の3カ国にはある本格的な図書館教育制度が不在であったものが、ここでやっと実現される運びになったのである。それはとりもなおさずスウェーデンの図書館情報学研究者待望の夢の実現でもあった。

一連の調査の中で、最近提出された“Svensson investigation”では、Borås 大学が図書館情報学教育の唯一校であることの弊害が指摘され、ファンドを Lund 大学、Umeå 大学にも配分し、競い合う研究プログラムを模索すべきであると勧告した。この中では特に大学院研究の重要性と学術性の意義が強調された。

ところが、図書館界がこの提案を検討している間に政権が変わった。現在もその骨子が変わりはないけれども、視点が高等教育システムに移行してしまった。こうしたマクロな政策は図書館学教育の変化にとって、これまでのあらゆる努力の結集よりもはるかに大きな影響を行使した。現在、次のような改善が進行中である。

- (1) 総合・単科大学にもっと大きな自主権を与える。これは大学が研究プログラムを自校で決定・実行できるということである。
- (2) 職業／専門職研究課題（実習）を廃止する。これは専門職訓練資格プログラム（この中に図書館プログラムも含まれる）の中で、特に合法と認められるもの以外は、この種の実習を学士・修士課程研究プログラムの中に組み入れるという意味である。

3. 図書館教育と新しい現実

この新法案によって研究プログラムの決定は大学当局の判断に任されることになった。問題は一定の予算枠内で、新しく加わる大学にもその資格を配分するという点である。これは Borås 大学にとって致命的な問題になるだろう。しかし、現実には新しく加わった Lund 大学、Umeå 大学に1993-94年、新学科が誕生し、新学期が始まった。

図書館情報学教育は今では正式な意味で、専門職教育ではなく、一つの学問領域と考えられている。その意味でも、その学術性を完全に遂行することが求められる。にも拘らず古い体質が相変わらず根強く残っている。それは旧式の専門職教育と新しい学術志向の教育との間の灰色ゾーンに多く見られる。最悪の例は、従来の教育プログラムに目新しい付録を付けて、当面の問題を切り抜け、後は次に回すというやり方である。これでは改善にはならない。一つの独立した主題として図書館情報学の研究を行なう大学や学部・学科が複数増設されたことは望ましいことである。その意味からも、Borås 大学と Göteborg 大学の協力体制と Lund 大学、Umeå 大学の2学科の誕生はスウェーデンの図書館情報学教育にとって大きな画期的な発展といえよう。

3. 1 新研究プログラムの誕生

Borås 大学はこの新しい状況に自らを積極的に適用させようと努力してきた。目的は図書館情報研究センターと協力し合い、図書館情報学の発展に寄与するためである。大切なのは図書館界全体が容認するような研究プログラムを作成し、スウェーデン全体の図書館がそれを基準に、この学問への科学的自覚を持ち、協力し合って、この学問を発展させていくことである。現在、一連の方策として次のような考えが実行されている。

- (1) 図書館情報研究センターへの協力を最優先する。この中には財政援助、人材支援、組織協力なども含まれる。
- (2) 個人の能力開発の奨励。センターの教授陣がその指導にあたる。
- (3) 多数の若い学生の確保。将来、博士課程に進む年齢層を確保するための方法を模索。

スウェーデンでは学士号取得に3年、修士号取得には最低4年が必要。4年制修士課程は大きな総合大学だけにあり、多くの中小規模の単科大学は学士号取得の3年間の教育プログラムしか行なえない。そのため、図書館員の新しい研究プログラムでは、前のシステムより短くなるという問題が起きる。これでは研究プログラムの改善にはならない。そこで協議の結果、Borås 大学が図書館情報研究センターの協力のもとに、修士課程の権利を認定して貰うことで決着が着いた。

3. 1. 1 新旧研究プログラムの相違点

- (1) 専門職業訓練の場から研究教育の場へ—新研究プログラムは Borås 大学が専門職業訓練提供の場から、一つの独立した主題分野の研究教育提供の場に変貌したことを意味する。大学院研究科が Göteborg 大学の図書館情報研究センターに設置される。
- (2) 継続教育制度を廃止—それはまた、図書館情報学教育が従来の継続教育であることを止めることでもある。その目的は他の大学と同レベルに立って教育を行なうことである。こうして初めて、学生は図書館情報学を主専攻、副専攻として選ぶことができる。例えば、経済学を主専攻に、あるいは歴史を主専攻し、図書館情報学を副専攻にして、学位を取得することができるようになる。これによって、従来の学部2年終了の学生応募だけでなく、高等学校から直接 Borås 大学を応募してくる学生も増えると予想される。
- (3) 学士号、修士号取得に学士論文、修士論文提出が必修—新教育プログラムは1993年に開始されたので、1995年の春には、学士論文、修士論文が出る。前のシステムのもとで勉強してきた学生については、1学年の研究成果を評価する論文形式の課題を課し、修士課程に進学できる機会を提供する。
- (4) 問題解決志向型教育の重視—新研究プログラムでは問題解決志向型の教育学の比重が益々高くなっている。これを促進するために、Borås 大学では図書館情報学研究プログラムの出発点として、これまでの原則そのものの見直しという方法を採用した。
 - (a) 図書館のタイプ別教育の枠を取り除く。その代わりに、現行プログラムではすべての図書館に見られるそれぞれの機能に重点を置く。

- (b) より広い一般的知識の習得に重点を置く。学生が学位取得研究に早い時期から専念できる体制を作り、それに必要な選択コースも増設する。
- (c) 伝統的な図書館教育システムの良いところを積極的に採用する。これまでの図書館活動から得た経験や知識を教授し、発展させることは非常に重要。それは図書館員共同体の集約された知識体系であり、精神的支えに他ならない。
- (d) 現代情報処理技術の積極的導入。高度コンピュータ・パークの確立。マルチメディア・ラボラトリーの設置。
- (e) 補助コースの設置。現時点で、書店経営、アーキビスト、図書館事務員、情報スペシャリストの業務に必要な特設コースを用意している。今検討中なのは「文献社会学」と「国際指向型図書館研究」のプログラムの設置である。この他にも多くの高等教育を受講できる機会が提供される。例えば、非常に人気のある「子供と教育学」などがその一例である。また、別の主題分野から図書館情報学の Ph. D. を取得するための研究プログラムも用意されている。

こうした新研究プログラムの効果は継続的な外部活動、例えば国内・国際会議、セミナー、シリーズ出版など、を通して強化されることが重要である。これは現在図書館情報研究センターを通じて積極的に具体化されている。その一例が英語による学会誌発行である。

優れた創造的な科学的雰囲気はそれを取り囲む世界との密接な関係から生じる。中でも大切なのが、分野の代表者と組織の代表者との良い関係である。特に新研究プログラムとセンターとの関係はその後のプログラム実行に大きな影響を与えるであろう。

また、Borås 大学は国際協力に高い価値を置いている。図書館情報研究センターは国内、北欧4ヶ国だけでなく、国際世界においても中心的役割を果たそうという大望を持っている。そのためには一連の組織変革が必要になるかもしれない。

3. 2 新研究プログラムの内容

新研究プログラムの学部課程は、図書館情報学の基礎知識を与えるために設計されている。この課程の大きな特色は図書館・文化・情報という3つの基本概念を新プログラムの中心に置いている点である。各分野のキャリアを専攻する学生が対象である。

修士課程は専門主題図書館員 (professional librarian) の資格取得のために設けられている。この他に、新プログラムは高等教育受験資格を得るための予備校の役割も果たす。ここを出れば有資格保持者となり、Göteborg 大学の図書館情報研究センターの修士課程の進学が許可される。(スウェーデンの大学は単位制で、20単位が1学期、2学期が1学年に相当する。)

3. 2. 1 学部課程の研究プログラム

図書館情報学基礎科目 (1-40単位) - これはさらに3ブロックに分けられる。

- (1) 図書館と社会 - 6単位
- (2) 知識の組織 - 20単位 (1学期 - 14単位、2学期 - 6単位)

(3) 人と図書館－14単位

ここでは各コースの目的だけを簡単に説明する。

(1) 図書館と社会－6単位

このコースは学生に社会的観点から、図書館と情報ユニットの機能と意義を理解させるためのもの。第一には、様々な方法に光を当て、様々な発想から生まれた歴史的背景に照らし、図書館／情報ユニットのタイプの違いを理解させ、定義する。このコースの目的は、図書館・文化・情報には現在いろいろな考えがあり、それが交じり合っていることを教え、一つ一つの概念を明確にし、学生に多くの側面が見えるように指導すること。

第2には、いろいろな方法を使って、図書館と情報ユニットに関係のある重要なシステム、特にリテラシー、教育システム、情報市場などがどんな関係にあるかを調べさせる。採用する方法も学生に考案させる。

第3には、図書館員と情報スペシャリストの関係、図書館と隣接システム（教育システムと情報市場）の関係について、その性質を言及する。

(2) 知識の組織－20単位

このコースの目的は情報の組織と検索に関する理論知識だけではなく、実践上の知識を学生に与えること。3つの小目的は第一に、分類・目録作成と利用の基礎知識と分類・目録の作成の実践、データベース構築の実践。第2には、様々な主題分野の基本的・一般的な参考資料とレファレンス・ワークを学生に気付かせること。参考調査業務に、条件、方法、問題、探索法を関らせて理解させることに重点を置いている。第3に、情報市場の拡大、情報技術の開発を通して発達している情報ユニバースを扱う。図書館員が単独でグローバルな情報システムを開発する可能性を、システムのナビゲーションの難しさの体験から学ばせ、議論させる。

(3) 人と図書館－14単位

人間と図書館／情報ユニットの関係を扱うコース。主な目的は2つ。一つは、様々なグループと知識・情報・教育・文化の間の関係についての基本的問題を提起し、研究・調査させる。特に人と図書館／情報ユニット、人と資料の関係に注目する。もう一つは、図書館の利用、館内資料の利用を促進する方法を考える。

3. 2. 2 修士課程の研究プログラム (41－80単位、または41－100単位)

修士課程に進むには図書館情報学の基礎科目1－40単位を修了していることが必要。ここでのご指導は図書館情報研究センターとの共同作業によって行われる。修士課程の研究プログラムは4つのブロックに分けられる。

(1) 方法論 (methodology)－3単位

(2) 管理と収集 (management & collection)－7単位

(3) 選択コース－5単位＋5単位

(4) 学位論文－20単位、または10＋10単位

ここでは、主目的だけを述べる。

(1) 方法論－3単位

主な目的：図書館情報学の研究調査方法の紹介と学位論文執筆の準備。

(2) 管理と収集－7単位

主な目的：図書館／情報ユニットがどのように組織化され管理されているか、基本的な知識を学生に与えること。特にローカルな図書館／情報ユニットの業務に必要な機能に光を当てる。

(3) 選択コース－5＋5単位

主な目的：学生たちに自分の専攻を決定させること。多くのコースが準備されている。

(4) 学位論文－20単位、または10＋10単位

修士号は2つの方法のいずれかによって授与される。20単位に相当する論文を書くか、10単位に換算される実務経験と10単位に相当する論文を書くかのいずれか。論文執筆は一人の指導教授のもとで指導を受け、完成品は最終資格審議会に正式に提出され、公開審査を受け、それに合格して初めて認可される。修士課程は5期まで延長できる。

また、修士号を持っていなければ専門主題図書館員／情報スペシャリストとして専門職につけないために、修士課程にそのための特設コースが設けられている。修士課程中に学士の資格を取ることができる。必修科目は、方法論－3単位、管理と収集－7単位、学士論文－10単位。

3. 2. 3 学位授与と博士課程の研究プログラム

学位授与と博士課程の教育は Borås 大学と協力して、Göteborg 大学の図書館情報研究センターで行なわれる。博士課程入学は修士号授与を基礎に許可される。

4. 図書館情報学校と学問観

新研究プログラムを軌道に乗せるためには、その実行と並行して、プログラムを刺激し、合法化する創造的な学問観の発展も不可欠である。今、スウェーデンでは名実ともに本格的な図書館情報学研究が始まったばかりである。伝統的な図書館界の戸惑い、培われてきた多くの図書館経験と知識の集積の一部改正、諸外国からの新しい図書館情報学観、不慣れな情報通信機器の導入など、今それぞれの科目を担当するスタッフ一人一人が独自のやり方でこの状況を克服しようと懸命に努力している。例えそれが緩やかな速度であろうと、変化は着実に進行している。今現在、スウェーデンの図書館情報学研究者が図書館情報学に対してどんな学問観を持っているか定かではない。図書館情報学に単一の集約された見解があるわけではないと断った上で、Borås 大学の学部長、Romulo Enmark 教授は次のように私論を述べてくれた。「少なくとも3つの視点から捕えることが必要だろう。一つは、実務指向の職業訓練法と学術的・抽象的な教育構想の関係をもっと明確にし、分かりやすくすること。二つ目は実務と抽象の関係を明確にした上で、この分野の限界と理論を分野内部でまず十分に議論しあい、それをもとに、両者の関係と関連づけを行うことが必要。第3には、こうして得た判断が分野の同意を得たものであるなら、図書館情報学の今後の教育の中心軸にすべきである。これを応用する現場の人

達に賛同を得ない科学観、学問観を無理やり押し付けてもほとんど意味がない。図書館界全体が納得する学問観が必要だろう」。

4. 1 実務 対 理論

この問題は常に現場が強い力を持っている学問分野で問いつけられてきた疑問である。しかし、この答えは既に解決済みと Enmark は指摘する。「教育とは常にどんな形であれ、理論の抽象化を暗に意味している。実務の最も極端な例がいわゆる年季奉公である。あらゆる形の職業訓練である。この点からも、スウェーデンの図書館情報学校は学術抽象指向の立場を取ってきたし、取るべきである。今度の新教育方針によってこの志向はさらに強化されるだろう。しかし、全く問題がないわけではない。既に述べたように、労働市場に有用かどうか未経験の新研究プログラムを実行することは大変勇気がいることだ。現場の人達は、図書館学校で教えることはほとんど役に立たないと口を揃えて言う。現実の世界では使えない抽象的理論だと。教育者はこれをもっと真摯に受けとらなければならない」。

教育が理論指向であり、学術抽象の世界であっても、図書館情報学が独自の科学基盤に立って、単独で自身の適法を作ることは難しい。将来、この主題が存続できるかどうかを決定する大きな問題である。スウェーデンの今回実行された新研究プログラムがそれを教えてくれるだろう。

4. 2 理論 対 経験

理論は学問の揺るぎない枠組みと知的指向の厳格な定義を持った科学観を必要とする。目的はその学問独自の理論基盤を築くことである。Enmark はこの考え方がアングローサクソン域の情報学観にも見られると、その限界を鋭く批判する。「図書館情報学分野の中心は、情報処理、情報検索、情報利用者であるという。理論／アプローチは受け手／送り手モデル、ビブリオメトリック、認知／因果関係などによって特徴づけられている。そして、これ以外の重要な問題、例えば文化と図書館の調停と呼ばれる課題の扱いなどには全く、あるいはほとんど注意を払わない。このような科学観がスウェーデンの専門職代表者の賛同を得るとは到底考えられない。」

経験はいわゆる実証的現実を基盤にした科学観である。専門職が自らの経験から生じた現実の問題を、教育者が取り上げ、研究するやり方である。問題の有用性がまず初めに問題になり、その有用性が確認されてから、より具体的な図書館・情報・文化の問題へと進む。理論と経験は科学社会では同等の価値を持つ、と Enmark は強調する。スウェーデンでは分野代表者に有用と認められるような教育内容と研究を提供することが図書館情報学校に求められているとも指摘する。

4. 3 スウェーデン図書館情報学研究の科学観—実証的抽象

スウェーデンの図書館情報学研究の集合的科学観は〈実証的抽象〉という特殊な考え方である。これは他の国々の図書館情報学観とは異なっている。その理由として、(1)現場で有用と認

められる教育や研究を提供する場でありたい。(2) 教えるスタッフの能力と関心が多彩。(3) これまで行なわれてきた研究テーマは経験重視のものがほとんど。

確かに、大学の教員たちは実に多彩な主題経歴の持ち主である。関心も一様ではない。文学、人類学、化学、生態学などいろいろな分野の出身者である。そのため、関心領域もさまざまである。いくつか例を上げてみると、図書館史、文献社会学、児童文学、図書館の教育学機能、プロフェッショナルリズム、利用者調査、分類研究、評価方法、マルチメディア、システム理論、図書館と移民など。さらに小さなテーマになるととても一つの主題分野に収まり切れない。

5. 図書館情報学観と教育プログラム

図書館情報学をもっと広い実証的観点から見ることは、当事者にとってそうたやすいことではない。スウェーデンの図書館情報学研究者はさまざまな能力や資源を結集して、図書館情報学界が認めるような主題観を作ろうと努力していると Enmark は Borås 大学でのその軌跡を説明してくれた。現在4つの委員会がスタッフによって自主運営されている。スタッフは複数の委員会に所属できる。委員会の主な関心事は次の通り。

- (1) 図書館／情報ユニットをマクロ構造の観点から考える。この中には、図書館史、文献社会学、図書館と社会、専門職のアイデンティティー、図書館と教育システム、図書館と情報市場などの関心テーマが含まれる。
- (2) 情報検索。この中には、分類・索引・目録作成、参考調査業務、データベースの利用、マルチメディア、情報戦略、情報公開など。
- (3) 人間と図書館／情報ユニットとの相互作用。この中には、知識の社会学、教育学理論、文化科学理論、文化慣習、図書館習慣、利用者に達する方法、教育学法、利用者の要求を証明する方法など。
- (4) 図書館／情報ユニットをローカルな視点から見る。システムと組織論、業務コンセプト、蔵書・マーケティング・評価の知識、経済学。

これら委員会の主な仕事は学部の基礎研究プログラムの4コースを補助すること。委員会の構成はプログラムの構成と一致するように作られている。

「スウェーデンの図書館情報学校は教員の構成と研究の構造が一致するような学問観を築き上げ、具体的な形を見付けようと努力している最中なのだ。だからこの組織モデルは最良案でも最終案でもない。これからが始まりである。だんだん良くなるよ。誰かがそのとっかかりを作らなければね」、彼はそう語ってくれた。

この論文は1994年のスウェーデン Stockholm 大学海外研修中に得た知識とその間に訪問した Borås 大学の学部長、Romulo Enmark 教授との面談と彼の著書を中心にまとめた。スウェーデンの図書館情報学教育について書く機会を与えてくださった Enmark 教授に心から感謝の意を表したい。

参考文献

- Hans Eirik Aarek, Kalervo Jarvelin, Leif-Kajberg, Maj Klasson and Pertti Vakkari. Library and information science research in the Nordic countries 1965–89. In: *Conceptions of Library and Information Science*, ed. Pertti Vakkari and Blaise Cronin, Taylor Graham, 1992, 28–50.
- Järvelin, K. and Vakkari, P., Content analysis of LIS research articles in 1985. "Library and Information Science Research", 1990, 12, 4, 395–421.
- Klasson M. University libraries in change. summary. In: *Högskolebibliotek i förändring*. Malmö: Liber, 1984, 241–252.
- Nour, M. A. Quantitative analysis of the research articles published in core library journals of 1980. *Library and Information Science research*, 1985, 7, 261–273.
- Romulo Enmark. *Library education in the melting pot. Swedish school of library and information science*. University of Borås. 1993.
- R. Enmark. *Defining the library's activities*. Chalmers, bibliotekets reprocentral, Göteborg 1990, 94P.